

「それを一まい一まいはがして、まずしい人にあげなさい。生きている人は、金があれば幸福になれるといつも考えているのだ」ツバメはじゅん金を一まい一まいはがしていき、とうとう幸福の王子は完全にかがやきを失い、はい色になってしまいました。ツバメがじゅん金を一まい一まいまずしい人におくると、子どもたちの顔は赤みを取りもどし、笑い声をあげ、通りで遊ぶのでした。「パンが食べられるんだ」と大声で言いました。やがて、雪がふってきました。その後にしもがおりました。通りは銀でできたようになり、たいそう光りかがやいておりました。水

しょうのような長いつららが家のの
きから下がり、みんな毛皮を着て出
歩くようになり、子どもたちは赤い
ぼうしをかぶり、氷の上でスケート
をしました。かわいそうな小さなツ
バメにはどんどん寒くなってきました。
でも、ツバメは王子の元をはな
れようとはしませんでした。心から
王子のことを愛していたからです。
パン屋が見ていないとき、ツバメは
パン屋のドアの外でパンくずを拾い
集め、つばさをぱたぱたさせて自分
をあたためようとしてしました。でも、
とうとう自分は死ぬのだとわかりま
した。ツバメには、王子のかたまで
もう一度